

## 茜色の歌姫



## 第六部 壬申の乱



壬申の乱（想像模型）

是<sup>すめらみこと</sup>天皇、高市皇子に謂<sup>かた</sup>りて曰<sup>のたま</sup>はく、「其<sup>そ</sup>れ近江朝には、左右大臣、及び智謀<sup>かしこ</sup>き群臣、共に 議<sup>はかりごと</sup>を定<sup>な</sup>む。今朕<sup>われ</sup>、與<sup>とも</sup>に事を計<sup>はか</sup>る者無し。唯<sup>いとけなくわ</sup>幼<sup>こども</sup>少<sup>すく</sup>き孺子<sup>こども</sup>有<sup>あ</sup>るのみなり。奈<sup>いか</sup>之何<sup>かに</sup>かせむ」とのたまふ。皇子、（中略）奏言<sup>も</sup>さく、「近江の群臣、多<sup>おほ</sup>なりと雖<sup>いふと</sup>も、何ぞ敢<sup>あ</sup>えて天皇の靈<sup>みかげ</sup>に逆<sup>さか</sup>はむや。天皇独<sup>ひと</sup>りのみましますと雖<sup>いふと</sup>も、臣高市、神<sup>あまつかみ</sup>、祇<sup>つかみ</sup>の靈<sup>たま</sup>に頼<sup>よ</sup>り、天皇の命<sup>いのち</sup>を請<sup>ま</sup>げて、諸

將を引率て征討たむ」(中略) 天皇誉めて、手を携り背を撫でて(中略) 鞍馬を賜ひて、悉に軍事を授けたまう。

(『日本書紀』卷第二十八)

## 第五章 犬上川 672

月が変わって七月一日。

内裏の正殿に、御史大夫の蘇我果安と巨勢比等が召された。

倭媛皇后を寢殿の奥深くに押し込めてより、大友皇子は正殿の一室で政務を執る。果安

と比等が入ると、大友皇子の傍らに、百濟より来たった王族が一人、酒杯を手に侍っていた。

「蘇我果安、巨勢比等、汝等を將軍に任じる」

大友皇子は言った。

「五千の兵を率い、不破にある大海人皇子を誅戮すべし」

果安と比等は拝礼し、互いにそつと眼を遣った。

大海人皇子が吉野を抜け出して東国に入つてより、二人は、軍を興して兵を東へ進めるよう、強硬に献策していた。その折りには、自ら大將軍として軍を率いることを希んでいた。もちろん、大海人皇子を討ち、やがて大友皇子が天皇の御位に即くことを見据え、大きな功勲を樹てておきたいという腹もあった。

大友皇子は、これまでのように豪族の私有する兵に頼るのではなく、戸籍に基づいて徴した民で軍を編もうとしていた。しかしながら、諸国に派した興兵使者からの報せははかばかしくなく、穂積百足のように討たれた者もいる。

大友皇子としても、大豪族である蘇我や巨勢に頼るしかなかったのだ。しかしながら……、果安も比等も、ともに思った。何故に吾独りに任せぬ、と。

「さらに……」

大友皇子は続けた。

「山部王を大將軍とする。汝等、よく大將軍を輔け、逆賊どもを討ち平らげるべし」

山部王……。果安も比等も、驚きを隠して面差しをあげ、大友皇子の傍らに坐すその人を見や  
った。

山部王は、大友皇子の従弟。二十歳になったばかり、色白く、眉目秀麗。大友皇子の催す漢詩  
の宴にもたびたび侍り、信は厚い。その性は酷薄にして傲岸。

大海人皇子の娘である十市皇女が、妃として大友皇子の宮に上がったおり、大友皇子は、ふぐ  
りを蹴られて寝屋をともにすることを拒まれた。その後、大友皇子は山部王をして皇女を姦せし  
め、自らは酒を飲んで眺めた。そのことは、果安も比等も知っている。

大友皇子もまた、大海人皇子を討った先を見すえて策を練っていた。日本が大和と呼ばれてい  
た頃より大王家で重きをなしてきた蘇我や巨勢、中臣らを牽制するため、百濟人である山部王に  
こそ、功勳を樹てさせたいのであろう。

「疾う、軍を調えよ」

そっけなく命ぜられ、二人は退った。

——あの二人……。

傍らの山部王が、不意に百濟言葉で喋り始めた。

——なにやら、不服そうだったな。

——気にするな。

大友皇子もまた、百濟言葉で応えた。

——お前が大將軍になったことが問題なのではない。果安も比等も、ともに自分こそが第一の  
重臣と自負している。何故、同格の將軍として並び立たねばならぬのか、そこが不満なのさ。

——つまらぬ見栄の張り合いか。

——なに、彼等の不満を煽り、せいぜい働かせてやればいい。戦いが終わった後、お前こそが、  
私の腹心として、ともにこの国を牛耳ることになるのだから。

——それよりもまずは……。

山部王は、唇を舐めた。

——せっかく東国に行くんだ。その地の女を思うまま味わいたい。

——よせ。

大友皇子は真顔で答めた。

——戦場だ。無用の女漁りは控えろ、部下にしめしがつかんぞ。

山部王は下卑た笑いを響かせ、その音にまぎれ、天井の梁で影が動いた。

その夜更け。

内裏寢殿の倭媛皇后の寢屋。

皇后や十市皇女、十人の女嬬とともに押し込められてより、九日目であった。天井の梁を小さ

く叩く音が三度響き、額田郎女は眼を醒ました。

——土蜘蛛の使いか……。

郎女は臥せたまま、枕元の床を小さく三度叩く。音もなく床に降り立ち、郎女の隣に俯せに臥せたのは、土蜘蛛の瀬莉であった。

「明日、山部王を大將軍、蘇我果安と巨勢比等を將軍とし、五千の兵が不破に向かう」

耳元で囁く瀬莉に、額田郎女はびっくりと背を震わせた。

山部王……。やや離れて静かに寝息をたてている十市皇女を辱めた百濟人。その名を耳にし、沸き上がる憤りを抑え、郎女はすばやく考えを巡らせつつ問うた。

「置始比等には、報せたか……」

大海人皇子が近江に派して内裏を探らせていた舎人どもは、倭媛皇后が押し込められてより、ほとんどは不破へと向かったが、置始比等をはじめ数名が、密かに残っていた。

瀬莉は短く「報せた」と応え、さっそく使者が不破に向かったと付け加えた。

使者がぶじ、不破に着いたとしても……。五千の大軍、すぐに迎え撃つべく軍を編むには間に合うかどうか。さらに、数は五角でも、兵器、軍馬等の備えは、比べものにならぬ。

とすれば……。

「瀬莉」

額田郎女は静かに問うた。

「近江の軍に潜み不破に至るまでに、山部王か蘇我果安、あるいはその二人を共に誅する……汝独りにて、し得るか？」

「し得る」

瀬莉はあっさりと応え、郎女は問い返した。

「独りにて、し得るといふのか？」

「殺めるだけならば」

郎女は首を動かして、傍らに臥す瀬莉を見つめた。闇の中に、笑みを浮かべた邪気のない貌が伺えた。

年齢は十五。額田郎女が、巫那と呼ばれていた頃、蘇我鞍作を板蓋宮で誅したのと、ほぼ同じ年。

瀬莉は、この齢で幾人を殺めてきたのだろう。

郎女は瀬莉の耳元で囁いた。

「無事、誅殺し終えた後は、必ず生きて還れ」

「諾」

瀬莉は頷いて立ち上がり、消えた。郎女は胸の裡で続けた。  
……生きて還り、誰かを恋し、子を産み、平らかに暮らせ。

身を刺す夏の日差しはなかな、近江京の大路を、綺麗びやかな甲冑で身を覆い、鮮やかな彩りの旗幟を靡かせ、五千の兵が進んでいった。

その先頭を行くは蘇我果安。肥えた馬にまたがり、見送る人垣を睥睨しつつ、胸を張って威を保った。

列の中央、天蓋のついた輿に坐し、片膝を立て、時に群衆に手を振っているのは、大將軍である山部王。すでに朱を帯びた貌は、朝から酒杯を重ねていたらしい。

最後尾は巨勢比等。列の先頭を望んだが、やかましく言い募る果安に譲らざるを得ず、不服な色を面差しに滲ませている。

巨勢比等は、昨夜の軍議を脳裡に思い浮かべ、苦いものが腹からこみ上げてきた。比等はその席で、軍を二つに分け、一手は淡海の南岸を東へ向かい、一手は北岸を進み、不破の大海人皇子の陣を挟撃すべしと献策した。果安は一笑に付した。

そのような姑息な策を練るべきではない。堂々と大軍をもって押し出し、逆賊を討ち平らげてこそ、国を統べる者の軍と譲らなかつた。山部王は果安に賛し、比等の献策は斥けられた。

軍議が果て、他の将たちが去った後も、蘇我果安は山部王の室に残つた。果安は、近江に都が遷つてより、百済言葉を習い覚えていた。百済より来たった王族とも親しい。それ故、臆慮にさられている……。

巨勢比等は、妬みに腹を炙られつつ、馬を進めた。

二日の行軍を経て、近江方の軍は大上川に着いた。不破へは北東に百里（約50キロ）。あと二日で着く。

大上川は、大上の里を縦断し、淡海に注ぎ入る、川幅は一町（約100メートル）ほど。河原に近い草原は、五千の兵の幕舎で埋め尽くされた。

四隅に柱を立て、布をかぶせたばかりの幕舎の群からやや離れ、山部王の幕舎のみは、前もつ

て里の者に建てさせた高床の家であり、床には獣皮を敷き詰め、酒や飯、木の実、干した魚や肉が調えられてあつた。

「物見の兵を出すべし」

家に入った山部王が開いた軍議の席で、巨勢比等は喧しく言い立てた。

「大海人皇子も、物見を派して、吾等の動きを知っているはず。すでに軍を動かしているやもしれぬ故に……」

「諾、諾」

山部王は煩わしそうに、汝に任せる、とのみ言い、蘇我果安に、大上の里長はまだか、と問うた。果安は意味ありげな笑みを浮かべ、すぐに参るはず、と応えた。

されば、明日は鶏鳴とともに発つ、寝め、と山部王は散会を命じた。寝ずの番は幾人ほど……、さらに問う巨勢比等に、汝等に委ねる、と出ていけよがしに山部王は言った。

溜息をついて山部王の幕舎を出でた巨勢比等に、

「先が案ぜられる」

と声をかけたのは、近江を本拠とする豪族で五百の兵とともに参軍した羽田矢国であった。

「昨夜も、夜を徹して、嬌声と悲鳴が響いていたと聞く」

矢国は吐き捨てるように言った。山部王の幕舎を護るのは、羽田大の配下の兵どもである。山部王と蘇我果安が、昨夜の幕舎で里の乙女



上川（滋賀県彦根市）

と三人で、痴態の限りを尽くしていた様が脳裡に浮かび、巨勢比等は眉根を蹙めた。  
「されど、近江に就いた吾等の存亡をかけた大軍。大將軍が如何なる御方であれ、備えを怠るわけにはゆかぬ」

矢国を宥めるように比等は言い、さらに続けた。

「吾は物見を十人派するが、汝の兵ならば、もとはこの地の生まれ、心きいた者を物見にやつてほしい」

「諾」

頷く矢国の背後で、兵どもがざわめいた。見れば、里の長に手を引かれ、独りの乙女が立っていた。齡は十五か十六か。俯く貌の稚なさに、比等は哀れを覚え、腹立たしさを抑えて己が幕舎に向かった。

「汝が名は？」

乙女が幕舎に入ると、山部王はすでに、蘇我果安と褥を並べ、だらしなく寝そべりながら、酒杯を口に運んでいた。

問われて乙女は、床に額ずいたまま、さな……と小さく応えた。

「さな、か。来よ」

手招きされるまま、乙女は、山部王と蘇我果安に挟まれるように坐した。

里長に教わったとおりにか、片膝を立て、臍の辺りに手のひらを重ね、物珍しげに床に敷かれた獣皮や、漆を塗った器に眼差しを動かしている乙女に、山部王は、唇を舌で舐めた。

男女のまぐわいが如何なるものかも知らぬげな乙女を、思うさま弄び、いたぶり、その陰を血で汚す。己が身を肉の棒で刺し貫かれる恐れに震え、怯え、やがて快に呻く乙女の様を脳裡に浮かべ、山部王は醜く貌を歪めた。あるいは、早くに男女のことを覚え、男の望むまま、淫らに振舞う乙女もまた、よきもの。この乙女はいずれであろうか。

「酒を」

乙女が口を開いた。

「そこに」

指さしたのは、家の扉。小さな甕が置いてあった。乙女は立ち上がり、細い腕で甕を抱き上げ、山部王と蘇我果安の間に置いた。不器用に甕の裡に湛えられていた酒を掬い、漆を塗った碗に注ぎ、両手で持って差し出した。差し出され、山部王は問うた。

「なんの酒ぞ。米を嚙んで酔した酒か？」

「木の実を酔した酒」

「木の実？」

「然り。柿の実を酔した酒」

小さな手で差し出された碗を、山部王は受け取り、口に運び、やや眉を顰めた。

渋い……。

「お気に……」

乙女は悲しげに眉を上げた。

「召したまわぬか」

怯えにいた面差しに、快を覚えつつ、山部王は立ち上がった。乙女の手から柄杓を奪い、酒を掬って蘇我果安に突き出した。

「果安、呑め」

果安は、命ぜられるままに柄杓に口をつけ、飲み干し、貌をしかめた。山部王はけたたましく笑った。

「犬上の里の酒を振る舞われた。礼をせねばの」

言うなり、床に置いた鞭を手に取り、甕を叩き壊した。土器の欠片が、酒とともに飛び散り、乙女は怯え、身を竦ませた。

山部王は立ち上がり、袴の紐を解き始めた。

蒸し暑く眠れなかった夏の夜は、秋の深まりとともに、しんしんと冷え始めていた。

大將軍である山部王の幕舎を護る兵どもは、裡より漏れ始めた男女の呻きに、眼を合わせ、互いに面差しを顰め、しかし、命ぜられたとおりに矛をまつすぐに構え続けるしかなかった。

数日前まで田を耕していた兵どもにとつて、將軍と呼ばれる貴人たちは、同じ人ではなかった。同じ人ではないがゆえに、希むままに里の乙女を召し、まぐわい戯れることがあつても、不思議はない。妬み、そねむ事柄ではなかった。

だが、軍を控えて、幕舎に里の乙女を引きずり込む將軍が勝てようか。そんな声が流れてくれば、話は別であつた。兵にとつてもっとも恐ろしいのは、負けることであつた。負けて命を失うことであつた。

山部王は、大海人皇子には勝てない。何故ならば、大きな軍を前に、里の乙女をむさぼることしか、心にならないから。

そう耳にして、まさに、幕舎に乙女を引き入れて姦す山部王の呻きは、不快でこそなけれ、不安を兵どもにも募らせた。不安は、夜の寒さを、より兵どもの身に食い入らせた。月が沈むまでここに立っていないければならぬのか……。兵どもは空を見上げ、中空に浮かぶ月影に、時の流れの遅さをのろつた。

不意に、足音が響いた。見れば、羽田矢国が、急ぎ足で近づいてくる。

日頃、見慣れた主が現れ、兵どもの頬が緩んだ。寒気のなか、貴人の繰り広げる痴態を思わずにすむ。だが、矢国は、見覚えのある兵どもに眼を合わせただけで、山部王の幕舎の戸の前に立ち、叫んだ。

「蘇我果安よ、報せたきことあり！」

幕舎から漏れていた、男女のあさましい笑い声がやんだ。

やがて、蘇我果安が、寝衣の胸元を掻き合わせつつ、出てきた。

「何事なりや？」

煩わしげに問う果安に、矢国は手にした木簡を差し出した。

「乙女よ」

幕舎の裡では、さかんに酒盃を口に運びつつ、山部王が心地よげに呻いた。その股間に屹立するものを握り締めた手を、乙女はゆっくりと上下に動かしていた。

「汝は、男を悦ばせる術を知っている」

乙女は、大きな眼を眠たげに開いたまま、黙して手を動かし続けた。

「いづくにて覚えた」

乙女は笑みを浮かべるのみで、応えない。山部王は手を伸ばし、その胸元に手を差し入れた。豊かに稔りつつある、しかし堅さの残る乳房を弄びつつ、さらに問うた。

「里に、まぐおうた男でもいるのか」

首を振り、乙女はやつと口を開いた。

「箸墓にて……」

「箸墓？」

「いろいろと覚えた。男を悦ばせる術も……」

乙女は、山部王の陽物から手を離れた。

「苦しめる術も」

その手が、山部王のふぐりにあてがわれた。右のふぐりに指が絡められ、凄まじい力で捻られた。ふぐりは瞬く間に碎かれ、山部王は声もなく失神した。

「巨勢臣に叛心あり……大海人皇子に通ず……」

羽田矢国が差し出した木簡に、黒く記された文字を読み、蘇我果安は問うた。

「誰がこの書を……？」

「知らず」

羽田矢国は首を振り、吾が幕舎の前に落ちていた、と告げた。

果安は考えを巡らせた。巨勢臣とはすなわち、將軍である巨勢比等。細かな策を使う男ではない。考えが粗く、ただ、宝大王の御代より政事の中枢にあつたという自負のみは強い。この度の軍旅にあつて、大將軍の山部王は年若な果安を重く用い、巨勢比等の献策はことごとく斥けられている。妬みから、謀叛の心を興すことはなくはあるまい。

とはいえ……。近江に随うのと、大海人皇子に付くのと、いずれに利があるかを思えば、謀叛など考えつくはずもない。果安は、自軍の勝利を信じて疑わなかった。数に差はないが、大海人皇子の配下にあるは、たかが東国の寄せ集め、兵器はこちらがより優れ、何より、内裏の御稜威がある。

幕舎より乙女の、悦びを含んだ呻きが漏れてきた。果安は、眼差しをそちらに向け、

「では、汝の兵にて、巨勢を見張れ」

とのみ命じ、踵を返そうとした。その袖を、羽田矢国は掴んだ。

「否、否」

「否とは？」

煩わしげに貌を顰めた果安に、矢国は言い募った。

「もとより、巨勢比等に謀叛の意などあるうはずもなし。それより気掛かりは、誰がこの書を吾が幕舎に置いたのか。大海人皇子の手の者が吾等が陣に潜み、吾等が互いに疑念を抱かせようとする謀ではないか、と」



「大海人皇子の手の者？」

不意に湧いた不安を打ち消すように、果安は声を荒げた。

「たとえ、そのような者が潜んでいたとしても、軍の行方には変わりはない。それより、さような疑念を抱く事こそ、敵の策にはまったも同じではないか」

汝にすべて委ねる。疾う汝が配下に命じ、その木簡が何故、汝が幕舎の前に置かれていたか、探れ。

言い放ち、果安は矢国に背を向けた。果安を苛立たせたのは、乙女とのまぐわいをしばし遮られたことばかりではなかった。巨勢比等の謀叛を告げる書が現れ、その事が何を示すのか思い至らず、例え思い至ったとしても如何処すればいいのか何も思い浮かばず、策の浮かばぬ己が明らかになることを、傲岸な果安は恐れた。

いずれ夜が明ける。夜が明ければ再び軍は東へ進む。東へ進めば勝利は間違いない、輝かしい功勳とともに近江へ還る。そう定まっている以上、思い煩うことはない。まずは、一夜を愉しむべし……。

幕舎の扉に手をかけ、開けた時、間近に里の乙女が立っていた。不敵な笑みの浮かぶその面差しに、虚を突かれる間もなく、股間に鉄の笞で打たれたかのような、重い衝撃を受けた。乙女の膝が、彼のふぐりを蹴り上げていた。

膝が溶け崩れ、床にうずくまった果安の首筋に、またも拳を打ち込まれ、眼は暗闇に閉ざされ、脳は痺れ、意識は遠のいた。

鋭い痛みが、股間から全身を貫き、蘇我果安は眼を開けた。

重い頭を上げて見回すと、彼はすべての着衣を剥ぎ取られ、両手を後ろ手に縛られ、左右の脚は広げられ、足首に結わえられた太縄は、床に釘で固定され、口には丸めた布が押し込まれていた。

果安の傍らには、同じように縛られ、口を封じられ、全裸で仰向けに臥せた山部王がいた。怯えて見開かれた眼から、涙が滝のように落ちていた。

乙女は二人の間に、こちらを向いて坐していた。背を床にもたせかけ、袴を着けた両脚を開き、踵を、それぞれの男のふぐりに乗せていた。

「目醒めたか」

貌を上げた果安を見やって乙女は笑い、ふぐりに乗せた踵を振り上げ、打ち下ろした。激しい痛みで果安は絶叫した。絶叫は口を塞ぐ布に阻まれて呻きにしかならず、乙女はけたたましく笑った。

もはや、再び貌を上げる力は残っていないなかった。ふぐりから腹部にかけ、焼けつくように熱い。総身に間断なく悪寒が走り、腹から苦いものがしきりとこみ上げてくる。

「二人ともに、ふぐりを一つ潰したぞ」

その声に、果安の四肢は冷え、震えが止まらなかった。

さきほどまで、左の手に山部王の、右の手に果安の陽物を握り、快を与えていた乙女は、平然と貴人のふぐりを潰し、縛り、なぶり続ける。動くこともかなわず、声をあげて外に屯する兵どもも呼べず、彼等の命も運も、僅か十五か六の乙女の思うままであった。

が蝶でも追うような眼差しで、乙女は山部王を見やり、ふぐりを踵で蹴った。山部王はのけぞり、激しく震えた。悲痛な呻きは外に漏れても、兵どもは昨夜と同じく、まぐわいとたわぶれの声としか思うまい。

「案ずるな、すぐには殺めぬ」

乙女は愉しげに言った。

「すぐに声が絶えては、外の兵も怪しもう」

いずれは命を奪うということか……。果安は怯え、山部王を見やった。山部王は苦しみ悶えつつ、眼を見開き、必死に口を動かし、乙女に嘆願しているようであった。

「汝等のうち、いずれかを誅せよとの命を受けた。こちらの御方は……」  
懇願を拒絶するように、乙女はまたも山部王のふぐりを蹴った。

「しばし後、死ぬ。されど……」

続けて、乙女は、果安のふぐりを踵で床に押さえつけ、圧迫した。息が詰まり、果安は口を開け、空気を求めた。

「こちらの御方は、如何しようかの……」

踵をふぐりから離し、足の指でそれを弄んで苦しめつつ、乙女は続けた。

「あるいは、生かしておいたほうが、面白くもあるか」

言うなり、強くひねりあげた。果安は、再び意識を失った。

夜明けが近づいていた。

羽田矢国は、眠れぬまま夜を過ごした。例の木簡は誰の仕業かはついに分からなかった。山部王も蘇我果安は、大軍を押し出せば勝てるものと信じて疑わず、ひたすら軍を進める他、何の策も用いない。

では大海人皇子は？ 兵の数とはかく、兵器の質で劣ることを知っていれば、勝つために様々な策を用いるのではないか。

矢国は、考えを巡らし、しかし、如何に考え抜き、策を練ろうとも、山部王らの容れるところにはなるまい。そう思い至ると、考えることがばかばかしくもなった。

やがて浅い眠りに落ちた頃、幕舎の入り口より、兵長の声がした。

「何か」

褥を出で、外に足を踏み出すと、東の山の端が赤く染まり、闇が払われ、湖面より立ち上る霧が、びしりと建ち並ぶ幕舎の群をかすませていた。

「物見の兵どもが還ってきた」

配下の兵長は、唇を震わせつつ、告げた。

「大海人皇子の軍は、すでに不破を発ち、玉倉部の邑に入った」

「玉倉部だと？」

玉倉部の邑は、この地より北東に約八十里（約40キロメートル）。このまま進めば、速ければ二日の裡には軍となる。矢国は問うた。

「その兵数は？」

「それが……」

兵長は青ざめていた。

「物見により、その数は違えども、少なくとも七千、あるいは一万という者もあり、いずれにせよ、敵陣の篝火の数は吾等に倍していたと……」

矢国は声もなかった。不破にある大海人皇子の軍は、二千かせいぜい三千と聞かされていた。何時の間に、そこまで兵数がふくれあがったのか。

まずは巨勢比等へ報せねば……。矢国は、巨勢の幕舎へ走った。昨夜、巨勢も物見を放ったはず。

巨勢比等は、すでに甲冑を着込み、剣を帯びていた。駆けつける矢国を二瞥したその面差しは、強張っていた。果たして、巨勢比等の配下の物見はすでに、やはり兵数一万に及ぶと報せていた。疾う、策を練らねば……。巨勢比等と羽田矢国は馬に乗り、山部王の幕舎へと駆けさせた。

朝靄を破って響く馬蹄に、山部王の幕舎を護っていた兵どもは、一斉に矛を構えた。

「巨勢比等と羽田矢国、大將軍山部王に言上したきことあり！」

兵どもは矛を収め、道をあげた。同時に、幕舎の扉が大きな音を立てて開き、一人の乙女が転げるように走り出た。

「如何した！」

馬を降りた矢国に、乙女はすがるように抱きついた。昨夜、里長から山部王に献じられた乙女であった。乙女は、蒼白の面差しに唇を震わせつつ、こわごわと、幕舎を指さした。

「大將軍が如何した！」

声を荒げて問う矢国に、乙女は、「そ……そがの……」と声を搾りだした。

「蘇我？ 果安か？」

乙女は頷き、「剣で……もう御一方を……」とのみ言い、地に座り込み、両手で貌を覆った。

羽田矢国と巨勢比等は眼を合わせ、頷き合い、ともに幕舎の裡に駆け入った。

「あ……」

寢屋に入った二人は、立ち竦んだ。全裸の男が二人、折り重なっていた。

山部王は、俯せに臥せていた。眼を閉じ、唇から血が垂れていた。その背から腹にかけ、長剣が貫いてあり、床に敷いた獣皮に血だまりを作っていた。

その山部王の背に、蘇我果安が覆い被さっていた。長剣の束を握りしめ、呆然と眼を見開いていた。彼の男根は、山部王の尻に刺さっていた。

「違……」

巨勢比等と羽田矢国に気づいても、蘇我果安は、眼ばかりこちらに向け、動こうとはしなかった。否、恐怖か怯えか後悔か、動かそうにも四肢が凍り付いたかのようにであった。

「違……吾は……」

「汝は！」

巨勢比等が、剣に手をかけ、抜き放った。

「軍を前にしての男色、その果てに大將軍を殺めたか！」

叫ぶなり、剣を振り下ろした。刃は蘇我果安の左の肩口から、肋を砕いて心の臓を切り裂いた。果安は弾かれたように立ち上がり、そのまま仰向けに倒れ、絶命した。

何という……。

羽田矢国は、返り血を浴び、剣を振り下ろしたまま、喘ぎつつ動かない巨勢比等と、転がった二つの屍を呆然と見やった。

自軍に倍する敵は、すでに八十里先。大將軍と將軍が男色に耽り、しかも、如何なるもつれからか、將軍は大將軍を姦しつつ殺め、その將軍を、別の將軍が斬った……。もはや、軍規は保てまい。

まずは何をすべきか。巨勢比等は、激情にかられ僚将を斬ったことを悔いてか、凝然と動かない。何かをなすとすれば、矢国しかない。

ふと、二つの屍を見つめ、矢国は小さく叫んだ。巨勢比等の肩を叩き、貌を上げた比等に、「あれを……」と言って指さした。

山部王の陰囊が、瓜のように赤黒く腫れ上がっていた。同じく、蘇我果安も。

あ！ 巨勢比等は叫び、総身を細かく震えさせた。

「如何された」

訝しげに問う羽田矢国に、比等は呻くように言った。

「土蜘蛛……」

「土蜘蛛？」

巨勢比等の脳裡は、かつて、土蜘蛛の安見娘に、股間を蹴られた激しい痛みと、長く続いた苦しみが蘇った。矢国は、直に土蜘蛛と関わったことはない。しかし、かつて大和の諸処に放たれた数百の土蜘蛛の恐ろしさは、耳にしていた。

「間違いない……土蜘蛛が、大海人皇子に味方し、彼等を……」

「では、あの乙女が？」

「然り……」

矢国は弾かれたように、外に出た。乙女の姿はなかった。兵どもに問うても、何時、姿を消したのか、いづくの方へ去ったか、知る者はいなかった。

東の山の端から日輪が貌を覗かせ、西に広がる淡海の湖面を煌々しく輝かせていた。吾を失って立ちつくす矢国の背後に、巨勢比等がよろよろと歩み寄った。

「吾は……近江に戻り、この件を大友皇子に奏上する」

その手に、大將軍の位を現す斧鉞が握られていた。比等は矢国に、大友皇子が山部王に賜った、玉壁で飾った斧鉞を無造作に手渡しつつ、呟くように言った。

「汝と……境合部薬を、將軍に任ずる……陣を堅くし、ただ、守れ。兵を進めるなかれ……」  
足早に去っていく巨勢比等を追う気にもなれず、矢国はしばし動かなかった。動かず、策をめぐらせた。軍に勝つための策ではない。己が生き残るための策である。

やがて、策は固まった。矢国は、兵に命じ、境合部薬を呼んだ。訝しげに現れた境合部薬に山部王と蘇我果安の死と、巨勢比等の離脱を告げ、あまりのことに驚き惚ける薬に、強く言った。

「事が陣中に伝われば兵は動揺する。ここは討つて出て、戦う他に策はなし。疾う、陣払いを！」  
あまりに不意の出来事に、なんの考えも浮かばない境合部薬は、羽田矢国に随う他はなかった。五千の兵は、その先に待ち構えるものが何かを知る間もなく、慌ただしく犬上川を発ち、東へと向かった。

陣を払って軍を進めた羽田矢国は、まず物見を放った。戻ってきた物見は、すでに大海人皇子の軍がこちらに向かいつつある、と告げた。物見の報せを聞き、羽田矢国は、馬を走らせ、境合部薬に駆け寄せた。矢国は言った。

「このまま進めば、両軍が出会うは、息長の里の西を流れる天野河となるう」

息長の里は約四十里（約20キロメートル）先。この期に及んで勝機を求めらば、渡河を試みる敵を迎え撃つしかない。河の流れが兵の足を遅くし、あるいは列を細めて橋を渡ってくる敵を待ち受け、包み込むようにして討つ。

「さらには」

矢国は付け加えた。吾等は近江を本拠とする故、湖で漁する安曇の者とも縁が深い。吾はひとたび軍列を離れ、安曇の舟を徴し、敵の背後に回って挟み撃ちする。この策は如何か。

「汝に任せる」

境合部薬は、すぐるように言った。すでに、敵が自軍に倍するとの報せは、境合部薬の耳にも入っていた。思いも寄らぬ成り行きで將軍となった彼は、泰然と落ち着き払った羽田矢国に頼るしかなかった。

矢国は、五百の兵を随れて陣を離れ、湖岸へと向かった。

やがて日が落ちようとする頃、天野河まで二里（約1キロメートル）ばかりとなった境合部薬は、物見の騎兵を放った。やがて息せき切って駆け還ってきた物見は、まず、敵軍は未だ二十里（約10キロメートル）先があり、と告げて、薬を安堵させた。敵よりも先に天野河に辿り着き、陣を

敷いて待ちかまえることができる。

だが、物見の報せはまだあった。

「羽田矢国、すでに大海人皇子の軍に降伏せり！」

悲鳴に似た物見の言に、境合部薬の心身は凍りついた。逃げたのか……。

「疾う！」

薬は叫んだ。

「疾う、橋を落とせ。全てだ！」

天野河の西岸に陣を敷いた近江の軍が、やっと橋をすべて焼き払った頃、すでに夕闇の迫る東の岸に、大海人皇子の軍が姿を現した。

軍を率いるのは、高市皇子。濛々と煙を上げる橋を眺めつつ、傍らの將軍、村国男依に言った。

「渡河は明日の朝になるな」

男依は頷いた。この時代、夜軍の慣わしはない。邸を襲うならばともかく、夜の野での軍は、同士討ちになりかねない。

大海人皇子の軍は皆、赤い巾を首に巻き、旗幟も赤く染めてあった。不破から軍を進めつつ、近隣の豪族に参軍を促し、加わった者どもに赤い巾と赤い旗幟を賜った。そして今、新たに羽田矢国の五百の兵を得た。

赤は、八百年の昔、いまは唐となった中華の地に漢を開いた高祖・劉邦が、その旗幟に用いた色。即ち、大海人皇子を、秦を滅ぼして漢を興した劉邦になぞらえるという、讚良皇女の策で

あつた。

対岸の近江の陣は、隙間なく木楯を並べ、静まりかえつていた。怯えた獣が、穴に籠もつていようにも見えた。

「瀬莉の勲功の大ききよ」

高市皇子は言った。土蜘蛛の乙女に大將軍を誅され、戦意も萎えたと見える。

「如何する？ 戦うか、それとも降伏を促すか」

問われて村国男依は応えた。

「何もせぬが良策かと」

渡河して攻めるとなれば、自軍にもかなりの損害が出る。降伏した羽田矢国によれば、敵軍を率いる境合部葉は凡庸な男で、大軍を率いる器ではない。放つておいても、自ら壊れる。羽田矢国のように、陣を抜けて降伏する者も出よう。

「では……」

男依の献策を受け、高市皇子は命じた。

「篝火を盛大に焚け。さらに、羽田矢国の兵を、川岸に置き、酒を配れ」

やがて日が落ち、夜も更けた。近江方の陣からは、対岸の河原で、羽田矢国の兵どもが酒に酔い、歌い踊っている様が見てとれた。その背後に、空まで続こうかと思われる篝火の群。

その夜、千を越す兵が、夜闇に紛れて陣を抜け出し、あるいは己が里に向かい、あるいは河を渡つて対岸の敵に降伏した。

夜が明け、自軍が三千足らずとなつた事を知つた境合部葉は錯乱した。

「巨勢比等は……戻ってくるのか」

まず、山部王と蘇我果安の死を報せに近江に還つた將軍巨勢比等の名を口にして左右に問うた。応えられる者は誰もいない。境合部葉は言った。

「近江に使を派せ」

何をすべきか、誰かに決めてほしかった。昨夕、天野河に着いてより、葉は一刻たりとも眠つていなかった。ひたすら敵影に怯え、死んだ山部王や蘇我果安、近江に還つた巨勢比等、敵方に走つた羽田矢国ら、己を窮地へと追い込んだ人々を呪い、いたずらに考えをめぐらし、しかし何の策が浮かばぬことに苛立つた。

さらに、山部王を殺めたのが里の乙女を装つた土蜘蛛であることが、山部王の幕舎を護つていた兵の口から漏れ、陣中に拡がって葉の耳にも入つた。

幕舎の外で、夜風が枝を揺らしても、葉は震えた。今も陣中に潜む土蜘蛛が、己のふぐりを碎きに来るのではないか。

その日、ついに対岸の敵は動かなかった。敵が動かねば、打つ手はない。近江よりの使は還らず、なすべき事も見つからず、境合部葉は、ひたすら恐怖だけを己が脳裡で無益に募らせた。

敵が動かぬは……やはり土蜘蛛を放っているからか。敵が土蜘蛛を放てば、狙われるのは、將軍になつてしまつた葉である。

「近在の里という里に兵を入れ、美まし乙女がいれば、悉く捕らえて吾が陣へと随れ来よ！」  
ついに葉は命じた。

「抗えば殺せ！」

命を与えられた兵どもは、勇んで駆け出した。そのまま姿を消す兵もいれば、命ぜられたとおり、里に入って家々の戸を押し開き、乙女と見れば片端から捕らえる兵もいた。彼等もまた、薬と同じく、先の見えぬ軍に不安を募らせていた。その矛先は、罪もない乙女たちに向けられた。抗って姦され、殺された乙女も少なくなかった。

翌朝。

「敵陣より舟が一艘、漕ぎ寄せてきた」

との報せを受け、高市皇子は村国男依を伴い、河岸へと出た。見れば、敵の將軍、境合部薬が、甲冑を剥がれ、後ろ手に縄を打たれ、数名の兵に引き据えられている。

舟を飛び降り、川面に波立てて岸に上がり、高市皇子に拝礼した豪族らしき男が、甲高い声で告げた。

「吾等が將軍、境合部薬、風説に怯え、妄りに無辜の民を殺傷す。故に吾等、薬を捕らえ、大海人皇子のもとに降る。赦したまえ」

聞けば昨夜、近江方の陣にある数名の豪族どもが談合し、境合部薬の幕舎を襲って縄を打ち、夜明けを待って降伏の使を立てたのだという。

兵の脱走は止まらず、対岸の近江方の陣に残るはもはや二千足らず。その二千足らずの兵が一斉に降伏を申し入れた。

高市皇子は彼等の降伏を受け入れた。すなわち、大友皇子が派した五千の軍は、戦うことなく

自壊したのである。

陣を払い、天野河を渡って対岸に出た高市皇子は、まず降伏した兵どもの兵器を解かせ、近江方の旗幟を焼き払い、赤い旗幟と巾を渡した。ついで、近在の里長を集め、境合部薬が捕らえた乙女どもを解き放ち、里へ還した。その際、境合部薬の命に抗い、五人の乙女が殺され、四人が兵どもに姦されたことが分かった。

「境合部薬の首をはねよ」

高市皇子はすぐさま命じた。

「その首を、殺され姦された乙女の里にさらせ」

さらに、乙女が犠牲になった家には、手厚く慰撫し、米などを与えるよう命じ、さらにこう付け加えた。

「近江方の兵が、五十人の乙女を殺し姦したと、風説を流せ」

五十……。首を傾げる村国男依に、高市皇子は静かに応えた。

「五十人と言え、風説が近江に届く頃には、百人にも二百人ともなる」

民どもは皆、近江方から離反するであろう。

十八歳の皇子の策に領きつつも、村国男依は冷え冷えとした思いを禁じ得なかった。さらに皇子は命じた。

「瀬莉を呼べ」

天野河にほど近く、樹々に覆われた丘の、櫓の木の枝に腰をかけ、細い足を宙に揺らしつつ、

土蜘蛛の瀬莉は、摘んだ野苺を口に運んでいた。

務めのない時は陣中についてはならない、そう言われていた。男ばかりの軍の裡に乙女が一人混じれば、何が起るか分からない。

ゆつくりと唇を動かして苺を噛みつつ、瀬莉は独り、笑った。

何がおかしくて笑うのではない。その人の面差しが脳裡に浮かべば、自然と頬が緩む。

四歳の時、生まれた里を襲った山津波で両親を亡くし、以来、土蜘蛛として育まれた瀬莉は、親の貌すら覚えていない。

四歳のとき、土蜘蛛を束ねていたのは鏡郎女であった。その年に、土蜘蛛の多くが百濟へと渡り、白村江での軍で殆どが死に、鏡郎女は姿を消した。ものごころついたとき、土蜘蛛を束ねていたのは安見娘。土蜘蛛の務めも、天皇の催す宴の護りくらいでしかなかった。

それでも瀬莉は、土蜘蛛の技を鍛えるため、修練を積んだ。命ぜられるままに見知らぬ男とも戦い、そのふぐりを碎いた。務めを終え、年上の土蜘蛛に「よくぞし得たり」と誉められるのが嬉しかった。誉められたい一心で、男どものふぐりを碎き続けた。

その安見娘も死に、多くの土蜘蛛は散り、残った瀬莉ら五人は、大海人皇子を助けるため、額田郎女の差配で働くようになった。近江の内裏で蘇我赤兄が誅殺され、大友皇子が大海人皇子とその一族を捕らえるべく動いた時、瀬莉は高市皇子を伊賀へと導いた。

瀬莉にとつて、男とは、碎くべきふぐりを持つ者でしかなかった。男を護って動くのは初めてであった。ぶじ、近江を抜け出し、鹿深の道を通って伊賀に辿り着いた時、高市皇子は、秀麗な面差しに笑みを浮かべ、「よくぞし得たり」と瀬莉を誉めた。犬上川の岸辺に敷かれた敵陣に潜

み、山部王を誅殺し、務めを果たしたことを報せに、対岸の高市皇子の幕舎に入った時も、皇子は「よくぞし得たり」と相好を崩した。

また、務めを果たし、高市皇子に誉めてほしい……。瀬莉はそう希み、なすべき事がない時、脳裡に浮かぶのは高市皇子の面差しばかりであった。

ふと、天野河の方に、一筋の狼煙があがるのが見えた。瀬莉に向けて、急ぎ来よ、という合図であった。

瀬莉は枝を飛び降りた。

新たな務め……。

眼を輝かせ、瀬莉は飛び跳ねるように丘を駆け降った。

兵どもの眼を巧みにかすめ、瀬莉は高市皇子の幕舎に入った。拝礼して貌を上げると、いつものように、高市皇子が將軍の村国男依と並んで坐していた。

「近江へ行け」

高市皇子は口を開いた。瀬莉は頷いた。そのみを告げ、皇子は立ち上がった。瀬莉の傍らを通り、背を向けて幕舎を出た。

笑みが溢れそうになっていた瀬莉の面差しが強張った。これまでは常に、なすべき事は高市皇子から語られていた。しかし、高市皇子は何も告げずに去った。

瞬きもせず、皇子の去った後を眼で追う瀬莉に、村国男依が言った。

「これより近江に行き、内裏に潜み入り額田郎女に伝えよ」



再びこちらに貌を向けた瀬莉に、男依は続けた。

「諸処に散った土蜘蛛を近江に集めよ」

すなわち……。面差しを変えず、男依は言った。土蜘蛛は、これよりの軍いくさより外す。

瀬莉は、半ば唇を開け、村国男依を見つめた。言葉の意とするとところが、分からなかった。男依は、わずかに頬にいらだちを浮かべ、さらに言った。

「境合部葉が、土蜘蛛に怯え、里の乙女どもを殺傷したことは、知っていよう」

おやおずと頷く瀬莉に、男依は続けた。

「境合部だけではない。飛鳥に派された近江方の兵が、里々で同じように乙女を捕らえ、殺めた数も少なくないと、報せが来た」

それ故……。これより、吾等は土蜘蛛の助けなしに、近江方と戦う。汝等土蜘蛛は、近江に行き額田郎女の近くにいよ。

「いずれ、吾等が近江に迫る時、大友皇子は、内裏の寝殿に押し込めた倭媛皇やまひめのみまぎ后ごや十市皇女とおちのみめみこを質として吾等を嚇し、あるいは皇后や皇女を害し奉ろうとするやもしれぬ。その前に、手を尽くして皇后、皇女、そして額田郎女を救い奉れ」

瀬莉は俯いた。零れる涙を必死に抑えた。

「これも、大事な務めぞ」

優しげに添えられた男依の言葉も、瀬莉には慰めとはならなかった。

諾。

拝礼し、唇を固く結んで幕舎を出たとき、もはや留めようもなく、涙が溢れた。

「もはや……」

幕舎の裡で、村国男依は溜息をついた。

「土蜘蛛は、不要ということか……」

飛鳥に派された近江方が、無辜の乙女どもを捕らえていると知ったとき、高市皇子は、特に憤ることもなく、ただ、土蜘蛛を軍より排する理由が出来た、とのみ言った。

飛鳥の豪族どもが、勲功を得るため土蜘蛛を排したのと同じ事が、不破を発した軍の裡にも起こっていた。声には出さずとも、参軍した東国の者どもの不満を、冴え冴えと慧い高市皇子は感じていた。

そのことを、男依は、苦々しくは思わなかった。土蜘蛛どもの働きなしに、一兵も損ずることなく勝ち進むことはできなかっただろう。それを思えば、土蜘蛛どもは哀れであった。しかし、男依もまた、土蜘蛛が政事まつりごとに容喙ようかいするかつてに復すべきとは、毫ごうも思っていなかった。

翌日の夜。

近江の内裏に忍び入った瀬莉から、額田郎女は高市皇子の命を聞いた。

扉の外にあって、押し込められた女どもが寝入った後も、時折小窓を開けて覗く兵の眼を逃れるため、郎女の傍らにうつ伏せて語る瀬莉の声音が、わずかに震えていた。

「よくぞし得たり」

語り終えた瀬莉の肩を軽く叩き、郎女は言った。

「汝等の働きで、もはや大海人皇子の勝利は七分は固まった。第一の功勳は、汝等にある」  
慰撫したつもりであったが、瀬莉は応えなかった。

額田郎女は、高市皇子とは近江で幾度か会ったことがある。言葉は少ないが、思慮深く、伶俐にものごとを見る。大海人皇子が兵を委ねたのも、もつともであった。海人皇子に味方する者どもとて、利は求めていよう。

出来得れば避けたかったが、まったく干戈かんかを交えずにすむとは、額田郎女も思つてはいなかった。それよりも、土蜘蛛が軍から排された上は、この近江が戦場いくさばになることもありえる。無事、倭媛皇后や十市皇女、そして共に押し込められた十人の女孀むすめどもを逃す策を、急ぎ練らねば……。

ふと、傍らに臥す瀬莉の肩が、細かく震えているのに気づいた。十五の乙女は眼をつむり、何かに耐えていた。

「瀬莉」

郎女は静かに問うた。

「何を悲しむ……。汝は、よくぞなし得た。しかも、まだ務めは終わってはいない」

瀬莉は、うつぶせたまま、激しく首を横に振った。額田郎女は言うべき言葉を失った。

やがて瀬莉は、震える声で言った。

「軍より離れよ、との命、村国男依より聞いた」

「……」

「高市皇子ではなく……」

再び口を噤ぐんだ瀬莉の喉から、嗚咽おえつに似た音が漏れた。

額田郎女の脳裡に、高市皇子を伊賀に導いたこと、山部王を誅し高市皇子に賞せられたことを報せに来た折、瀬莉の貌に浮かぶ弾けるような、それでいて切なげな笑みが蘇った。

瀬莉は……かつて巫那あだと呼ばれていた頃の郎女が、大海人皇子と出会った時と、齢よわがあまり変わらぬことに気づいた。

「汝は……」

肩を震わせて忍びなく瀬莉の肩を、腕を伸ばして郎女は抱きしめた。

「恋を……覚えたのだな」

小さく頷く瀬莉を、額田郎女はいとおしげに見つめた。

今は辛かるう。伶俐な高市皇子が、土蜘蛛の恋を受け入れるはずもない。やがて大海人皇子が国を統べるようになれば、政事まつりごとの中枢に就くべき身。伊勢で、棄てられたも同然の境遇にあった頃の大海人皇子とは違う。

だが……。人を恋うることを覚えれば、土蜘蛛でなくなっても、生きていける。何よりも、大きな褒賞を、瀬莉は得たはず。そうあってほしいと、郎女は念じた。